

平成 22 年第 4 回定例会-3C(第 7 日 12/6)

●議長(浅野正明) 木村哲也議員。(拍手)

[木村哲也議員登壇。「木村さんもそうだ、いなくなるんだから」と呼ぶ者あり。笑声。「遺言か、遺言」「心臓が痛いって」と呼ぶ者あり]

●木村哲也議員 ごめんなさい、本当に痛くなっちゃって。ごめんなさい。ほとんど池沢議員と同じことになってしまうんですが、提案者のおっしゃるとおりだと、私、本当に思います。議会改革は必要であります。文章も用意したんですが、もうほとんど同じなので、持論も述べながらお話をさせていただきますけれども。やはり二元代表制ということは、議会と行政側が両輪ではなくて、やっぱり対立的立場でなきゃいけない。そして、オール野党がなければいけないというのが議会である。それは、私は当然であると考えております。(「与党が違うじゃないか」と呼ぶ者あり)うるさいよ。(笑声)

例えば、機関委任事務事項の廃止以降、行政は条例の制定度が高まって、自由度が高まったということで、政策立案能力が高まっているんです。それに対抗する議会とはいうと、それからさほど変わっていないんです。変わっていないんです、そう。だから、追認機関と言われてもしょうがない。だからこそ、私はその政策比較選挙というものが本当に必要で、入り口部分からそういう政策のなき者が淘汰されていくというのが、本来のあるべき姿かなと思うところでありまして、そしてその公約が本当に果たされているのか、4年間、市民の目線というフィルターを通して守られていない方は次の選挙で淘汰をされると。それが政策サイクルであって、それが議会ではなし得ていないです。それは、今議会でも指摘したとおり、行政でも政策サイクルというのがなし得ていない状況のもと、そういうのを議会でも確立して、その対立的にある我々が、チェック機関である我々がチェックをしていくというのが二元代表制のあるべき姿だと考えております。

もう1つは、我々は条例制定率が非常に低くて、皆無に等しいと。それを本当につくれる能力があるのかどうなのかというのが質なのかもしれませんし、つukれないのであれば議会事務局の力を高めていく。高めてからといって、初めて条例のつくり方を習うんじゃないわけ、ある程度——私はもう、今、一般の市民は本当にお伺いすると、マイナス10じゃないですよ。正直言って、半分でいいんじゃないかって言いますよ。そして、その根拠を伺いますと、「大体、そのぐらいでいいんじゃないの」。というのが、根拠がないんです。それは、2つ言えることは、議会を理解していない。や

はり議会議員は 24 時間フルタイムで議員をやっている。それで、その大変さを理解していないというところが、市民の目が入っていないからというのが 1 つの理由。

もう 1 つが、すべてを理解して言っているということがあります。学者なんかも、すべてを理解して議会を変えなきゃいけない。それは、先に地方分権、地域主権というものがあって、財源と権限が我々におりるわけでありますから、その財源と権限を生かさなければいけない。本当に、今の議会で生かせるのか、個々が政策立案能力を持っているのかということなんだと思います。

そこで、議会を変えなければいけないということで、私の主張も、議会基本条例は非常に必要であると考えます。(発言する者あり)この間、話したでしょう。議論の期間が少ないんですよ。報告書をまとめる期間も少ない。もっと早く出すべきであって、「同じことだ、同じ」と呼ぶ者あり)やじはいいよ、ちょっと待ってよ。

自治基本条例は、私は要らないと思う。しかしながら、長谷川議員のこの提案の中には、ほぼ、あと議長選のマニフェストであったり、議員数削減もうたえるとかあって、それプラスアルファ、もう議会基本条例の中にいろいろ盛り込めたりするわけで、やはりそれを議論していくことが必要だと思ひまして、こちらが先じゃないんですかということとはもう質問されましたので、私は、その議会改革の中で本当に必要だと思うのは、やはり個々の意識改革なんだと思います。

だからこそ、私も議員になってからは本当に政策を勉強させていただきましたし、まだまだ日々勉強が足りない状況にありますし、その部分を変えなければいけない。みずからが変えなければいけないとともに、地方議会自体が変わらなければ、より一層市民に見放されてしまうということでありまして、その部分ではもう大賛成なんですけれども。

そこで、少数イコール精鋭か、というところが非常に疑問です。これ、全国の例を見ても、少数イコール精鋭になっていない例がある。改革派の議員がその 10 人の中に含まれてしまうということがしばしばあるそうです。

それで、もし 40 人残った中で、例えば議会基本条例反対派が多数残ってしまうということも全然考えられるわけでありまして、そうすると、より旧体制に戻ってしまうということもありますので、私、その部分がどうしても見出せられない。根拠がやはり納得ができない、理解できないというところがありまして、長谷川議員がおっしゃる、議会の討論できる議員であったり、政策立案できる議員であったり、追認機関にならない議員、その議員が本当に 10 人減らして 40 人 担保できるのかというところが、非

常にその根拠的なものが私は足りないと思ひまして、その部分だけを1つお伺いをしたいと思ひます。

[長谷川大議員登壇]

●長谷川大議員 今のご質問は、先ほどの池沢議員の質問とほとんど一緒のよう……。 (発言する者あり)

まず、改革派の議員がマイナス10のほうに入っちゃうんじゃないかというのは、それは多分、チャラ男が多いんですよ。それで、上辺だけをかじった、本当に上っ面だけを言ってる、ちゃらちゃらした議員さんが、そういうことに手を出してやろうとするからそういうことになるんだと思うんです。だから、本当は僕なんかじゃなくて、先ほどから議論に参加してくださっている先輩方がこういう提案をすれば、そういうことないのかもしれないんですけども。

基本的には、改革なんていうのを、ポピュリズムのごとく上辺だけで言う人たちってというのは、しょせんは見透かされちゃうというんですか、見抜かれちゃうんで、だから当選できないんだと思うんです、結局は。

先ほど池沢議員のご質問にも答弁しましたけれども、1クールじゃなくて、2クール、3クールしていくと、40人の選ばれた議員さんだから、それなりの振る舞いもするし、それなりの発言もするしということに、間違いなくなっていくんですよ。だから、そうなったらその議会の質の向上というのは間違いなくあり得るんで、最初のうちはなかなか難しいかもしれないけれども、2クール、3クール回っていくうちに、ちゃんと選ばれたという認識を持って、そういう活動なり、言動なり、振る舞いなりをしてくださるんだと思います。ということです。(「根拠はないの」と呼ぶ者あり)数字の根拠は——数字の根拠でしょ。(「いや、質」と呼ぶ者あり)質の根拠、質の根拠も言っていましたから、ちょっと答えますけど、それはもう、やってみなきゃわからないんじゃないですかね。(笑声)

いやいやいや、だってそうじゃないですか。(発言する者あり)うん。ここの議会だって、これで皆さんが当選してきて、一生懸命いろんなことを議論してて、先ほども申し上げたように、各議員さん個人個人というのは、みんな魅力的な人たちで、地元でそれぞれの支持者の方がいて、いろんな話を吸い上げてここに持ってきているわけですから、みんな魅力的なんですよ。それで、それに伴って質というものも上がってくるんで、そこは余り心配しないでいいんじゃないかと思っています。

以上でございます。(「40人で質が上げられない根拠がないじゃないか」と呼ぶ者あり)

[木村哲也議員登壇]

●木村哲也議員 自分の考え方との違い、あると思うんですね、いろいろ。私は、人数を減らすと質が下がってしまうという考えをまだぬぐい去れなくて、自分の中でいろいろ調査研究する中で、その根拠が探れない、見出せないところがあります。その理由が今の選挙制度にあると思っていてまして、まだ人気投票になっているところが、この選挙制度の入り口部分を変えないことには、質は僕、上がらないと思っております。

だからこそ、政策比較選挙というものを、まず最後の市議会では1週間、県議会では10日間ぐらいあるんですか、その選挙期間の間に政策が配布できないということ自体がおかしい制度であって、そこで政策を配られるように法改正をしていくと。そこで政策比較選挙で淘汰をしていくようなことが一番。それで受かった者が、当選してきた者が議会基本条例なるものをより議論をして深めていき、そのサイクルでまだまだ時間がかかるということなんです、その時間がかかるなりの手法というのが、私はあると思っております、やはり、まずはその入り口部分からの改革、そしてそれから内部改革を行って議論していく、掘り下げていく、そして、それを改めて反映していき、また入り口部分で精査される、淘汰されていくということが私の質の向上なので、ちょっと根拠の部分で違う考えかなというところがあるんですが、これはちょっと、質問をしません。(発言する者あり)だめですか。じゃあ、そのことについて一言述べていただいてよろしいですか。

[長谷川大議員登壇]

●長谷川大議員 質について、かみ合わない、やむを得ないというのが私の感想でございます、本当に、さっきも申し上げたように、やってみなきゃわからないし、やってみて、二回り、三回りしないとその議会がどうなっていくかわからないから、ここで何とも言いようがございません。

木村先生は大学院で政治学を勉強していらっしゃいますから、いろんなご見識があって、いろんな情報もお持ちで、学術的にも裏づけされているんだと思うんですけれども、私どもはどっちかという体感的にというか、感じるままに申し上げているのであって、そういうことですね。ですから、やってみなきゃわからないということでございます。